



『俵田明と村野藤吾』(仮題) の本を残したい！

宇部市は「共存同栄」の街です。この言葉はいまから100年前(大正10年)に生まれました。石炭で栄えたことで人口が急増し、村から一気に市になったときです。このとき2人のキーマンが登場します。世界的な建築家になる村野藤吾と、後に宇部興産の初代社長になる俵田明です。村野は欧州戦争後、破竹の勢いのアメリカを視察し、昭和に入るとソビエトやドイツを視察し、世界中の建物を目にしました。社会を良くするための建物が村野のコンセプトです。俵田のほうは欧州戦争期に炭鉱の電氣化を進め、昭和に入ると石炭から化学肥料を造る技術確立、宇部窒素工業を立ち上げます。技術革新で郷土を発展させるのが俵田のコンセプトです。時代の変革期にいた2人の出会いは、沖ノ山炭鉱(宇部興産の前身)を興した渡辺祐策の死(昭和9年)でした。渡辺の側近だった俵田が無名時代の村野を宇部に招き、遺徳顕彰のための渡辺翁記念会館を造らせたのが(昭和12年完成)最初です。これは村野の作品中、初めて国の重要文化財になった記念碑的建物です。以後、俵田は宇部ゴルフクラブハウス(計画案・昭和12年)、宇部銀行(同14年)、油化工業(同14年～)、窒素工業「事務所棟」(同17年)、市民図書館(計画案・同24年)、鉱業会館(計画案・同24年)、宇部興産中央研究所(同26年)と本社事務所(同28年)など次々と村野に依頼し、一流になるチャンスを与え続けました。戦後復興期にクラシック音楽の都に飛躍し、花と緑と彫刻の街になれたのも、俵田のイノベーション主義と村野の哲学的建築路線の流れに沿っています。皆さん、そんな物語が宇部にあったのを知っていましたか？

100周年までのスケジュール

- 2020 春から取材及び原稿の執筆を開始。
- 2021 春、脱稿。校正ほか。秋に本が完成。
宇部市立図書館で出版記念講演会を開催。



著者
堀 雅昭

俵田家は維新後の近代的石炭開発に身を投じた郷土の先覚でした。その延長線上の俵田明と村野藤吾の物語を市制100周年に再現したいと思います。郷土の誇りを残すために、取材費や本の制作に必要な経費、その他のご協力をお願いします。

弦書房代表
小野 静男

弊社は2002年に福岡市にて創業以来、一般的な歴史観から忘れられてきた近現代史を中心とした出版活動をつづけています。堀さんとは創業前からの付き合いで、今回も書店に並ぶレベルにまで仕上げ、全国発信のお手伝いをしたいと思います。



(仮題) 『俵田明と村野藤吾』を出版するための 寄付をお願いします！

取材や本の制作に活用させていただきます。
2,000円以上の寄付者には完成本を1冊進呈します。
受け取り場所は出版記念講演会の会場になる予定です。
ご寄付いただいた方は、巻末にお名前を記載させていただきます。
この本に関わったみなさん全てが
100周年のメモリアルになればと願っています。

—寄付の連絡はこちらから—
ube-hori100anniv@qf7.so-net.ne.jp

